

# 探訪 北の風景 87

## 地下鉄南平岸駅 札幌市豊平区

青木和弘

札幌市の地下鉄南北線「南平岸駅」の北側に、電車が地上に出てくる場所がある。まるで銀色の竜がうねるような軌道を覆うシェルターが400メートル先の高架駅につながっている。

6月の晴れた午後、始発の地下鉄真駒内駅から北へ向かう麻生行きに乗った。地下鉄が地下にもぐったり、地上に出たりする境界を意識して利用したことがないので、どんな乗り心地でどんな景色が見られるのか好奇心がわく。真駒内駅を出発した車両が緑の中を抜けると間もなく、左の車窓から自衛隊真駒内駐屯地が見渡せ、藻岩山をはじめ西の山々が眺められる。高架上を走る地下鉄は、自衛隊前駅、澄川駅と停車して南平岸駅

に着く。外の風景を楽しめるのはここまでだ。でも乗客はスマートフォンを見ていたり眠っていたりで景色を眺める人はいない。南平岸駅を発車すると窓はスーッと暗くなり地下に入ったのが分かる。1分ほどで平岸駅に着いた。この先は麻生駅まで地下を走る。

帰路の真駒内行きは、平岸駅をスタートして1分弱、窓が明るくなったかと思うと、高架上の南平岸駅に着いた。下車して平岸駅側の軌道を見ると確かに下り坂になっていた。ちなみに、シェルターの始まりから終点の真駒内駅までは、かつての定山溪鉄道の線路跡である。

平岸地区の開拓は、1871（明治4）年、岩手県の水沢藩士を中心とした62世帯202人の移住で始まる。平岸街道をはさんで東西62区画に分け、くじ引きで開墾地を割り当てた。水沢名産の麻を植え、生計を立てる計画だったが、平岸は土地がやせていて、次第に収穫量が落ち、前途に失望した人々は次々と平岸を去った。

代わって入植したのが、札幌中心部で資本を蓄えた商人たちで、彼らは「平岸第2世代」として平岸の発展に大きく貢献する。それがリングゴ園経営で、ウラジオストク（ロシア）に輸出するほど栄えた。第一次世界大戦がきっかけとなった「りんご景気」は、リングゴの値段が従来のに5倍にも跳ね上がり、平岸街道沿いにモダンな屋敷が立ち並び豊かな農村風景を形成したという。札幌出身の劇作家、久保栄の



南平岸駅を発車した麻生行きの車両内。発車して数秒で地下に入り、窓は暗くなり景色は見えなくなったが、乗っていて、坂を下りているような感じはしない。地下駅の平岸駅には1分ほどで到着する

戯曲『林橋園日記』は、日中戦争時の平岸を舞台にしたリングゴ農家の没落と人間模様を描いた作品。全国的に知られた「平岸りんご」の栽培は、戦後、札幌の宅地化の波にのまれて姿を消した。

「南平岸」という呼び名は、昔からあった地名のように普及しているが、実はその歴史は浅い。この地域の住所表記に南平岸はなく、あくまでも平岸〇条〇丁目となる。平岸地区で最初に設置された平岸小学校や最初にできた店である木村商店（現清水商店）もここにあるから、古くからの人々には、ここが平岸の中心地だという自負がある。

もともと南平岸駅は、市営の平岸霊園が近いので「霊園前」という駅名だった。後になって縁起が悪いから「南平岸」に改名するという話が持ち





地下鉄南北線の車両が地上に顔を出す場所がここ。南平岸駅の北側400メートルほどのところで、近くの歩道橋の上から、高架駅につながる銀色のシールド全体を眺められる。軌道の奥（南側）右手に見えるのは恵庭岳だ

軌道の両側の窓から日差しが入る明るい高架駅・南平岸駅のホーム。この電車は発車して数秒で地下にもくもり終点の麻生駅に向かう



南平岸駅から北側を望む。シールドが高架から下がって400メートル先で地上に降り、軌道は地下にもくつていく

上がったとき、「これじゃ、うちが平岸の分家みたいじゃないか」という反発が起きたのも無理はない。こうしたマチ発展の歴史を知らない住民が急激に増えたため、結局、1994（平成6）年に南平岸と改名されるのだが、南平岸という通称には、こうした少しややこしい経緯がある。

2021年12月16日で開業50周年を迎える地下鉄南北線の建設は、1964（昭和39）年の「札幌市における将来の都市交通網計画」に盛り込まれ、72年の冬季五輪開催が追い風になって実現した。経費節減のため平岸・真駒内間は高架になり、雪対策は実証試験の結果、アルミ製の屋根で覆うスノーシールド方式になった。開業から50年を迎えた札幌市の地下鉄はいま更新期を迎え、シールドも改修を待っている。